今日も良い一日であるように。

いつもの朝がやってきました。 朝日が上る前だというのに駅舎の煙突からは煙が立ち上っています。
駅舎の台所を見てみると、田舎駅勤務2年目にはいったリオンちゃんが朝ごはんの仕度をしているようです。
に：『おはよう～にゃ～』
り：『おはようございます。駅長さん。朝ごはんまでもうちょっと待ってくださいね。』
に：『ちょっと裏山に散歩に行ってくるにゃ～。』
り：『は～い。』
にゃんこ駅長はそう云うと駅舎の勝手口から裏山に入って行きます。
り：『毎朝起きたら、必ず裏山に散歩に行くけど何してくるのかしら？』
ちょっと考えて、でもそれ以上は考えずに朝ごはんの仕度をつづけます。
ほどなくいつもの一汁一菜に漬け物を足した朝ごはんとにゃんこ駅長のためのネコまんまを
用意しているとにゃんこ駅長が戻ってきました。
に：『ただいまにゃ～』
り：『おかえりなさ～い。ご飯、できてますよ～』
に：『ありがとうにゃ～。』
に、り：『いただきま～す。』

いつもの一日のはじまりの、長閑な風景です。

あれ？そういえばりおんちゃんは転勤の話しがあったようですが、どうなったんでしょうね？
実は先日本社のじんじぶから呼ばれて転勤の話しがあったようですが、なんと人事部長さんとの話合いの結果、さいごは泣き落としで田舎駅勤務を続けられるようにしてしまったそうです。
隣で聞いていた他の人のはなしだと最初はただ『いやです。とか『何とか転勤しないで済む事はできませんか。』と蚊のなくような声で話していたらしいのですが、15分ほどで眼が潤んできて、ほどなく大粒の涙がポロリと頬を落ちた時点で意味もなく罪悪感を感じたのだとか。
眼の前でこんな美少女に泣かれたんでは、人事部長さんもイチコロ。
あまりにも可愛い美少女に目の前で泣きながら訴えられてしまってあっけなく諦めて転勤を撤回したんだそうです。 その方も人事部長さんに撤回を進言したらしいですけどね。
田舎駅勤務を続けられるように手続きをすると伝えたところ、りおんちゃん感激して泣いたまんまの顔で半分笑いながら人事部長さんに抱きついて『ありがとうございます。』って言ったらしいです。隣で聞いていた人は応援してくれたお礼にって後でこっそりと頬にキスをいただいたらしいですが、その後半日は、ぼ～っとして他の人が声をかけてもうつろ状態で仕事にならなかったらしいです。
人事部長さんは言っているそうです。『次の話し合いはいつにしよう？』『でもな～また泣かれたらまた撤回しちゃうよな。今度は女子部員に説得させようか・・・。』『役得は役得と

して・・・来年が楽しみだな～。』とほとんどセクハラオヤジですね。。。

何はともあれ、そんな事があってりおんちゃんの田舎駅勤務はとりあえずまた１年は続くことになりました。　ただ、本社ではりおんちゃんの可愛さが噂になり田舎駅勤務希望者が続出しているようです。　また、電車の乗務員さん達の間では今まで会った事のある特別特急の運転手さんと車掌さんが他の仲間から相当うらやましがられているんだとか。　そんなこんなで本社でも田舎電鉄の駅でも噂になっている『田舎駅勤務の超美少女』に会うにはどうしたらいいんだ？との話で持ち切りになっています。　電車の運転手さんや車掌さんは乗務している電車が田舎駅方面に寄る可能性がまったくゼロでは無いので『いつかは！』と思っているらしいですが、そうでない人はわざわざ休暇を取って麓の温泉宿に一泊して田舎駅を目指して山道を歩いて登らなければいけません。　さらにその日のうちに山を下りてこなければいけません。

一度でも田舎駅勤務を経験した事のある社員さんの話では『いや～絶対無理！あの山道を一日で往復なんて。』　でも、社員さんなら駅に泊れるのでは？と思った人もいたらしいですが、確かに駅の待合室なら泊る事はできるらしいですが、会社から用も無く駅での寝泊まりはしないように。という決まりがあるのでそれもできないで諦めているようです。
あとは田舎駅宛の荷物を取りに麓の温泉宿にりおんちゃんが泊りにくる時を狙って同じ日に宿泊するっていう手がありますが、それもいつになるのかは判りません。　そのうち勇気ある人が試すかもしれませんね。

そんな会社内での喧噪を他所にりおんちゃんはにゃんこ駅長といつものとおり朝食とネコまんまを準備してそろってちゃぶ台で食べています。

に：『それにしてもりおんちゃん、よく勤務を続けられたニャ～』
り：『だぁって～あたしはここ田舎駅が大好きなんでもの～　人事部長さんに必死に頼みこんだんですもん。』
に：『私が言っているのはそういう意味ではないにゃ。田舎電鉄には確か田舎駅勤務は１年って規定があって絶対に例外を認めないって事になってたはずにゃ。』
り：『そうなんですか？　でも、あたしは続けられる事になりましたけど？』
に：『だから、不思議なんにゃ。りおんちゃんの可愛さが会社の規定を変えたのかにゃ？』
り：『駅長さ～ん、そんなあたしは可愛くなんか無いですよ～』
に：『・・・・・・・・　（気がついて無いのは無敵だにゃ）・・・』

と、かなり自分自身が判っていないりおんちゃんです。
元々新入社員の間でも噂になるほど可愛かったのですが、田舎駅勤務でのびのびとしている事や広～い駅の掃除とかでの適度な運動と田舎駅にある美人の湯で有名な温泉効果でさらに磨きがかかっている事をりおんちゃんは知る由もないのでした。

にゃんこ駅長はりおんちゃんがだんだんと変わってきているのに薄々気がついていたようですね。

二人の朝食も終わりりおんちゃんは洗い物をしてから駅でのお仕事にかかります。
電車も１年に１度くるかこないかと駅ではありますが、いつくるか判らないので切符の在庫とか駅舎の掃除とかやる事はいっぱいあります。　また、制服の洗濯とかもあるのでそうそう暇を持て余してって事もありません。　また、駅舎の周りは山また山のど田舎なので雑草取りも半端じゃありません。　春から秋までは雑草取りやら落ち葉の片付け、冬はかなり雪が降るので駅舎の周りの雪かきやら線路に積もった雪の状態の確認と雪かき、ポイントの凍結をしてないかとか大事な仕事もいっぱいあります。
そして、今朝は朝食後の最初に仕事は雪かきからです。
昨晩の吹雪で駅の周りは１メートルほど雪が積もっています。　この雪の中をにゃんこ駅長さんは散歩に出かけた？んですよね。　どうやって歩いたんでしょう。　確かに雪の上に足跡はついていますが。

り：『さっ、雪かきから始めましょうか。』
に：『ご苦労さんだニャ。今日も気をつけてやるにゃ。』
り：『ほんとに雪は片付けても片付けても降ってきますからね～　よいしょっと。』
に：『まずは、待合室の入り口の辺りとホームの上をやるにゃ。』
り：『は～い。』

広～い駅の周囲とホームの雪かきはそんなに簡単には終わらず午前中でやっとホームが全部終わるくらいです。　その他に駅舎の屋根の雪下ろしもしなければいけません。
そんな冬の田舎駅はかなりいい雰囲気なのですぐ近くの山からの景色は有名な観光スポットにもなっていますが、冬山登山に慣れた人でも滅多にきません。
そんな事は一切知らないりおんちゃんは鼻歌を歌いながら雪かきをしています。
もう田舎駅に勤務し始めてから１年が過ぎました。　駅と線路と自然とにゃんこ駅長を相手に過ごす駅での生活にもかなり慣れてきました。
そして本社では人事部長さんとの攻防の末に２年目の勤務を勝ち取ったと本人はウキウキ気分で毎日を過ごしています。
そんな中ホームの雪かきをしていると駅の中でベルが鳴り始めました。　前に聞いたのはもう半年も前の事ですがりおんちゃんは覚えていました。
即座ににゃんこ駅長のところへ駆け寄ると、
り：『駅長さん、列車がきます。』
に：『そんなに大きな声で言わなくても、ジブンにも聞こえてるにゃ。』
り：『今度はどんな列車がくるんでしょうね？　また特急列車かな？』
に：『こんなに雪が積もった中を特急列車だけではこれないにゃ。除雪車が先頭でくるんにゃ？』

り：『早く、こないかな～』
に：『列車が着く前にホームの雪かきは終わるのかニャ？』
り：『たぶん・・・・・・終わりませ～ん。』
に：『そうすると列車から降りた人は雪の中を歩く事になるにゃ？』
り：『そうですね・・・』

ほどなく遠くのほうから列車の音が聞こえてきました。　でも、なんか変です。　たくさんの車両が連結して走ってくるような音ではないのです。

に：『線路の雪かきに来たんだにゃ。』
り：『えっ？そうなんですか。』
に：『ここはほとんど列車が来ない駅だけど線路の雪をそのままにはしておけないにゃ。』
り：『そういえば、そうですよね。　あたしも線路の雪かきはしてないし。とてもできないです。』
に：『前にも豪雪の時に除雪車が来た事はあるんにゃ。』
り：『ふ～ん、そうんですか。』

やがて見えるところまで来たみたいなので、ホームに出てみるとにゃんこ駅長の云う通り、雪かき専用車が１両で線路の雪を飛ばしながら走ってきます。

に：『これなら雪かきが終わったところだけで足りるニャ。』
り：『よかった～、１両分くらいの長さなら大丈夫だわ。』

そして、雪かき専用車両がホームのちょうど真ん中、駅舎の真ん前で静かに停車します。
プシュー！！！　キィー！　とブレーキの音を軋ませながら停車しました。
ちょっとすると後ろの乗務員用のドアが開いて二人の運転手さんが下りてきました。
運転手さん達は雪かきが終わっているホームを歩いて駅舎に近寄ってきます。

運１：『こんにちは。　田舎電鉄　線路保守係の者です。田舎駅側線の雪かきに回っています。』
り：『ご苦労様です。　田舎駅勤務りおんです。』
運１：『君があの噂のりおんさんですか。　噂通りに綺麗で可愛いですね。』
り：『そんな～　可愛くなんかないですよ～』
運１：『いや。　田舎電鉄一の美人さんですよ。なっ！』
運２：『そうですよね。先輩。　りおんさん、ほんとにこんな綺麗な人を見たのは初めてです。いま映画やテレビに出ている人よりもずっとずっと可愛いし綺麗です』
に：『立ち話もにゃんだし、外は寒いから駅舎でお茶でもどうにゃ。・・・あれ？君だったんにゃ？』

運１：『にゃんこ駅長、お久しぶりです。　３年前に勤務しておりました。』
に：『中々立派になったにゃ。　主任運転手にもうなれたのかにゃ？』
運１：『ええ、ここの駅でにゃんこ駅長に教わったことを実践してたらあっという間でした。』
り：『さっ、みなさん駅舎の方へどうぞ。』
運１、２：『はい。　失礼します。』

運転手さん２人とにゃんこ駅長を抱いたりおんちゃんは駅の事務室で話を始めました。
りおんちゃんはお茶とお茶菓子を入れます。

運１、２：『あ～冷えた身体にはお茶が一番いいな～』
り：『よろしかったら、これもどうぞ。』
そう云ってりおんちゃんはお茶菓子を勧めます。
運１：『へ～こんなお菓子って駅にありましたっけ？』
り：『手作りなんでお味の保証はできませんが・・・』
運２：『手作りですか。　こんな美人のお手製菓子なんてまず食べられませんね。』
運１：『おいおい、そう興奮するな。　それじゃ、一口いただきます。』
運１：『こりゃ！うまい！これはいつ？作ったんですか？』
り：『たまたま偶然なんですが、今朝作ったんです。　でも、美味しいみたいで良かった。』
運２：『いや～ほんとに美味しい。美人で気だてが良くて、料理も上手って凄いです。』
り：『料理は判んないですよ？』　ちょっといたずらっぽくそう返したりおんちゃんです。
運２：『いや、いや。　料理が上手く出来ない人に美味しいお菓子は無理でしょう。ね、先輩。』
運１：『そうだな。　料理の基本があって美味しいお菓子ができるんだと思う。』
に：『ところで、今日はどうしたんだにゃ？　去年の冬もかなり積もったけど雪かきは無かったにゃ。』
運１：『自分達が居る保守課での方針が変わったんですよ。田舎側線もいつ列車が入るか判らないから、線路の除雪だけはやっておこうって。』
に：『それでかにゃ。　まぁ、成長した君の姿を見れてうれしいにゃ。』
運１：『にゃんこ駅長もお変わりないようで安心しました。　それに噂の美少女も見れたし。』
に：『噂ってどんなのかにゃ？　りおんちゃんは気にならないのかにゃ？』
り：『人の噂も75日って云うじゃないですか。そんなのに惑わされてもつまりません。　それに自分の事だと思うと云われるのはいい気持ちじゃないですし。』
運２：『いや、悪い噂じゃないですよ。田舎側線の田舎駅にもの凄い美少女の駅員がいるらしい。映画女優、テレビのアイドルなんか目じゃない。って話が本社人事部から広がっているんですよ。』
運１：『ただ、田舎駅は滅多な事では行く事ができない。それなんで、今日の除雪車運転は運転手仲間で取り合いだったんですよ。最終的には恨みっこ無しのくじで決めたんですけどね。』

運２：『そっ！先輩はくじ運が弱いんですが、今回は大当たり。たぶん、一生分のくじ運を使い切ったんじゃないですか？』
運１：『一生分使い切ったとしても良かったじゃないか。』
運２：『はい！そう思います。』

そんなこんなで１時間ほどみんなで話をしてから除雪車の発車の時間になりました。

運１：『御世話様でした。　お菓子、美味しかったですよ。』
り：『お気をつけて。お仕事頑張って下さいね。』
に：『この先の橋のところは慎重に運転しないと危ないニャ。　昨日山の友人が言ってたにゃ。』
運１：『はい。ありがとうございます。』
運１、２：『ありがとうございました。　お二人も気をつけて。』
に：『この駅は自然に守られているから平気だニャ。』
り：『お二人も気をつけて。』

二人の運転手さんは手を振って乗務員用のドアから除雪車の中に入っていきました。
ほどなく除雪車のエンジン音が響くと、ゴオッ！と音を響かせてから『ポーっ！』と汽笛を鳴らして静かに発車して行きました。　100メートルほど行ったところで、『ポーっ！ポーっ！』と２回、さよならの合図のように汽笛を鳴らして走っていきました。

り：『楽しい方達でしね。』
に：『久しぶりに会ったがずいぶんと大人になってたにゃ。』
り：『ええ。』

田舎駅をあとにした除雪車ですが、線路の雪をかきながら進んで行きます。　ここら辺は有数の豪雪地帯とされている事もあり、雪はかなりの高さまで積もっています。
運１『しかし、可愛い娘だったな。　お、少し出力を上げないとだめかな？』
運２『そうですね。滅茶苦茶可愛かったじゃないですか。　出力ですが20％くらい上げますか？』
運１『そうだな。でも速度は少し落として進まないと飛ばす力が追いつかないな。』
運２『凄い積雪量ですね。こんなの初めて観ました。』
運１『よーし、こんな感じでいいだろう。　そういえば、そろそろ駅長さんが云ってくれた場所じゃないか？』
運２『そうですね。　もう少し速度を落としますか？』
運１『慎重に行かないとな。にゃんこ駅長さんの友人のアドバイスは的確だからな。山の友人は頼りになるからな。』
運２『観た事あるんですか？駅長さんの友人って。』
運１『いや～いつも朝の散歩で山を回ってお会いしているらしいし、会わせてもらえないんだ。』
ガタンゴトン、ボー！と音を立てながら除雪車は雪を掻き分けながら難所の通過も無事に終わり、そろそろ本戦に合流するポイントまで近づいてきました。
運２『ここまでくると一安心ですね。田舎駅側線の通過は気を使いますね。』
運１『普段でも田舎側線は気を使うんだが、除雪車で通過は神経を使うな。』
運１『さっきの話だけど、りおんさんなら駅長さんの友人に会った事があるんじゃないかな？』
運２『そうですよね～　山の精霊でも会いたくなるんじゃないですかね。』
運１『また、会えるかな・・・・・・』
運２『先輩、、、運転に気を付けて下さいね。』
運１『判ってるさ。運転は慎重にだな。』
運２『そうですね。それこそ、正規運転手最短記録を持つ先輩です。』
運１『さ、本線に合流するぞ。運転指揮所に連絡。』
運２『アイ、サー』

話は変わってこちらはいつもの田舎駅です。
に『りおんちゃんは彼をみた事があるんニャ？』
り『ええ、、、入社式の時に優秀な先輩としてあたし達に挨拶をしてくれたんです。』
に『どうだったにゃ？』
り『あの時よりかっこよくなってました。』
に『そうだにゃ。来た時はどうしようかと思ったんニャが・・・』
り『何かあったんですか？』
に『外の事が一切判らない、連絡も取れないって事に耐えられない！って逃げ出そうとした

んにゃ。』
り『えっ！そうなんですか？外と連絡が取れないってそんなに不安なんでしょうか？』
に『不安に思わないりおんちゃんの方が変わってるニャ。』
り『そうですか？？？』
に『・・・（やっぱり、この娘は普通じゃにゃいにゃ・・・）』
そんな事を云いながら相変わらず二人は、正確には一人でりおんちゃんが雪かきをしています。いい天気だったんで、そこそこホームと駅舎の雪かきは進んでましたが、ちょっと休息をとることにしました。　朝からずっと雪かきしてますからね。
り『駅長さん、何か運転手さんにアドバイスされてましたよね？』
に『ああ、危険な場所の事かにゃ？』
り『ええ。山の友達に教えてもらったって云ってましたが、朝の散歩の時にでもお聴きになったんですか？』
に『そうだにゃ。朝の散歩の時に夕べの雪で雪崩が起き易くなっている、って云ってたんニャ。』
り『そう云う事ってなんで判るんですか？』
に『山で暮らしてる友人達はそういう事を知ってにゃいと生活できにゃいにゃ。』
り『そっかー、そうですよね。ね、駅長さん、こんどそのお友達さん達と駅でお食事会しましょうか。』
に『それは、無理だにゃ。彼らの食事をりおんちゃんは用意できにゃいにゃ。』
り『そうですか？ここにきて１年。大抵の事には驚きませんけど。』
に『彼らは自然のモノしか食べニャイにゃ。生の虫とか・・・』
り『う～ん・・・・・・それは確かに無理です～』
に『まぁ、りおんちゃんが云ってた事は彼らには云っておくニャ。』
り『残念です～　せっかく駅長さんのお友達にお会いできると思ってたのに・・・』
に『そんなに会いたいのかにゃ？』
り『気になるんです。どんな方達とお会いしてどんな事をお話ししてるのか。ここにきて１年以上経つのにあたしは駅長さんの事を何も知らないんですもの。』
に『私が話をするネコ。という事を知ってるだけじゃ不満かにゃ？』
り『とっても、不満です。いつから駅長さんをやっているのか、年齢は、とか駅長さんになったきっかけとか、何も知らないんですもん。』
に『それを知ったとしても何も変わらないにゃ。』
り『そうかも知れませんけどね。ちょっとお話が長くなりましたね。雪かきしてきます。』
に『（知ってても知らなくても何も変わらないニャ。知らなければ行けない事と知る為に努力することと、知っておいた方がいい事、全ての事柄は必要があって初めて自分の知識として身に取り入れていくんにゃ。りおんちゃんもいつかはこの事に気がついてその時は・・・）』

駅舎周りの雪かきも一段落してホームも何とか半分程度終わって今日の雪かきは終了したよう

です。
そして日が落ちてきてりおんちゃんは夕飯の支度を始めます。
その時ににゃんこ駅長が小さく鳴き始めました。
に『にゃ～ぉ～ぉ～ぉ。にゃ～ぉ～ぉ～ぉ。にゃ～ぉ～ぉ～ぉ。』
り『駅長さん、どうしたんですか。』
に『外を見てみるにゃ。』
り『外に何か？』
そう云って夕飯の支度の手を止めて窓から外を眺めてみると、其処には山から下りてきたらしいいろんな動物達が集まってきていました。
り『駅長さん、あれは・・・・・・・』
に『毎朝の散歩で会って話をしている友達達にゃ。』
り『外に出てみてもいいですか？』
に『りおんちゃんが外に出ないから、と云う事で来てもらったんにゃ。窓から見るだけにゃ。』
り『判りました。でも凄いですね。りすさんやうさぎさん、あっ！くまさんもいらっしゃる。冬眠しないんですか？』
に『彼らはこの周りの山々に住み着いて山を守っているんにゃ。だから冬眠はしにゃい。』
り『この近辺って一体全体・・・・・普通の知識が役に立たないですね。』
に『普通？何が普通で何が普通でないかは周囲の環境で変わるんにゃ。通り一遍の知識は役に立たないんにゃ。』
り『そうですね。あたしも勉強しなおさなきゃ。ありがとうございます。夕飯作りますね。』
に『んじゃ、彼らも帰っていいかにゃ。』
り『はい。ありがとうございました。とお伝えください。』
に『にゃぉぉぉ～～～ん。』

そしていつも通りに夕飯を食べてお風呂に入ってからお休みです。
にゃんこ駅長はちゃぶ台のしたでうとうと、りおんちゃんはいつも通り宿舎の部屋に戻ってお勉強です。

その頃田舎電鉄の保線部内では・・・・・・
運１『部長、ただいま除雪から戻りました。』
部長『おう、ご苦労さん。どうだった噂の美少女は。』
運１『えっ？えっ？えっ？除雪報告はいいんですか？』
部長『ははははっ！冗談だよ。まずは、除雪報告だが、おまえの事だ報告書に全て書いてあるんだろ。報告書をちらっとみたが、相変わらず完璧のようだからそんなのは後で読めばいいことだ。それより噂の美少女の事は報告書に無かったからな。』
運１『除雪報告書に業務以外の事は書けないじゃないですか。』
部長『そうだな。この報告書はトップまで上がるからな。それはいいとして教えろ。これは別の命令だ。』

運１『部長、奥さんは？』
部長『それとこれとは話は別だよ。別にどうこうしたいって訳じゃない。』
運１『それでは、報告します。』
そう云った瞬間に部長室のドアからひそひそ声がいっぱい聞こえてきます。
部長『ちょっと待て。』と小声で運転手に話すとそっと立ち上がって部長室のドアを一気に開けました。　ドアのところには他の運転手さん達が大勢集まって耳をそばだてています。
部長『しょうがないな。お前らも一緒に聴きたいんだろう。入れ。』
狭い部長室は運転手さん、保線区の人でいっぱいです。
運１『それでは報告します。本日午後田舎駅側線の除雪作業中に田舎駅で噂の美少女さんにお会いしてきました。　田舎駅勤務２年目との事でしたが、とっても可愛らしく、声も美声でもあり、１００人会ったら100人が一目惚れしてもオカシク無いと思いました。自分達も御多分に漏れずであります。』
部長『そんなに美人で声もいいとなると、そうかも知れんな。』
運１『更にあの辺の温泉風呂に毎日入ってると云ってて、肌もツヤツヤでキレイでした。また、お茶菓子に手作りのお菓子を頂きましたが、とても美味しかったです。』
部長『おお！手作りのお菓子までごちそうになってきたのか？うらやましい奴だ。』
他にも他の運転手仲間から羨ましがられるは、質問攻めに会うはでかなり時間をかけてしまいました。

運１『いい娘だったな。』そう云ってため息をついて運転手さんは宿舎に戻っていきました。

あとがき：かなり更新に時間がかかりました。すいません。ちょっとプライベートで手一杯だったんです。

田舎電鉄危うし？

『にゃにゃにゃ〜にゃ〜』朝からにゃんこ駅長が鳴いてます。どうしたんでしょう？
り『駅長さん、どうしたんですか？　まだ、夜明け前ですよ〜』
に『これはすまにゃいにゃ。起こしてしまったかにゃ？』
り『いえ、時計をみるとそろそろ朝ご飯を作るのに起きなきゃいけない時間なんでいいんですけど。どうなさったんですか？』
に『たまには早起きして発声練習にゃ。声がちゃんと出るように。』
り『あっ、、、そうでしたか。で、声の調子はいかがですか？』
に『快調にゃ。んじゃ、散歩に行ってくるニャ。』
り『いってらっしゃ〜い。みなさんに宜しくお伝えください。』
に『わかったにゃ。』
り『さ〜てと、朝ご飯は何にしようかしら。』

運1『は〜ぁ。朝だな。今日の勤務は何だっけ？あとでシフトを確認しておかなきゃ。』
そう云って運転手さんが起きて朝の支度をしていると部屋のドアを叩く音が。
運2『先輩、おはようございます。そろそろ朝ご飯行きませんか。』
運1『ちょっと待ってくれ。あとは制服を着るだけだから。』
制服を着てドアを開けるといつも同じシフトを組んでいる後輩と一緒に寮の食堂へ向かいます。
運2『先輩、昨日は大変でしたね。報告が。』
運1『そうだな。まさか、部長まであんなふうに聴いてくるとは思わなかったもんな。』
運2『同期の仲間に聴いたんですけど、部長は人事部長さんからかなり情報を聴いていて、あらためて聞く予定は無かったらしいですよ。』
運1『そっか、ならなんで報告させたんだ？』
運2『他の運転手仲間に状況を伝えようと思ったらしいです。僕ら以外は会ってないわけですから。』
運1『そっか、部長は自分が聴きたかった訳じゃなくて他の仲間のためだったって訳か。優しいな。』
運2『怒ると恐いですけどね。』
運1『怒るのは仕事だけじゃないか。仕方ないさ。』
運2『そうですね。』

二人が揃って保線区の建物に入ると何だかいつもより騒がしいようです。

運1『どうしたんだ？　なんか騒がしいな。』
運3『大変だぞ。本線で超特急列車が立ち往生したらしい。』
運1『えっ！？なんで？』
運3『それが原因はまだ不明らしい。』
運2『立ち往生した場所は？』
運3『田舎駅側線に入るポイントの手前と云う事だそうだ。まだ、詳しい状況が判らず部長が運行管理部に行っている。』
運1『どうしたんだろう？昨日通過した時は何も異常は無かったんだけど。』
運3『部長が帰ってきたら、対策やら何やらで忙しくなりそうだな。』
運2『そうですね。』

そうこうしてるうちに部長が戻ってきました。

部長『整列。みんな揃っているか。』
「保線区全員集合完了しています。」と副部長が報告します。
部長『よろしい。それでは事態の説明を行う。　まず、特急が停まっている原因だが、田舎駅側線に入るポイントに付いている電熱器の故障でポイントが凍りついて動かなくなってしまったのが原因らしい。いや、正確には今朝の運行開始前に点検で動かしたら元に戻らなくなった。というのがホントのところらしい。いま特急が動かなくなった場所のポイントを動かすのに一番近い駅から保線区の人間が向う準備をしているが、何分にも場所が悪い。』
運『何か障害でもあるんですか？レール上の雪は昨日除雪してますよね？』
部長『レール上の除雪は済んでいるが、周りの雪までは除雪できないからな。それにレール上を普通の列車で行く訳にも行くまい。ポイントが正常になってからの列車の運行を妨げてしまうぞ。』
運『じゃあ、一旦ポイントまで行って修理完了したら、田舎駅側線に入って待機？ですか？』
部長『田舎駅側線に入って待機したら今日の最終列車が通過するまで待ってなきゃいかん。それも辛いだろうに。とにかくここから応援に行くかどうかは後で決めるつもりだ。』

いつもより多い雪と低い気温がポイントに悪さをしているみたいですね。　特急列車は本線上ですが前にも後ろにも動けないようです。

り『おっかしいな〜駅長さんったらどうしたのかしら？　まだ散歩から戻らないなんて。』
に『ただいまにゃ〜　りおんちゃん、出かけるニャ。』
り『えっ？朝ご飯前ですよ。　こんなに早くどこへでかけるんですか？』
に『山の友達の話では特急列車が立ち往生してるにゃ。　早く防寒着を着て出る準備ニャ。』
り『は、はい！』

にゃんこ駅長はりおんちゃんに云ってホーム脇の倉庫からいろいろな機械の準備をさせています。
それから田舎駅に常備してあるトロッコにそれらを積むと（田舎駅は全て自動でできるんです）、トロッコの操縦をりおんちゃんにさせて特急列車が立ち往生している場所に向かいます。

り『駅長さん、積んだ荷物ってどうやって動かすんですか？初めて見る機械ばかりであたし動かせないんですけど。。。』
に『だいじょうぶにゃ。動かしかたは観た事あるニャ。』←どんなネコさんなんでしょう？

そう、ここ田舎駅はポイントまで一番近く一番機動力がある機械が揃っているんですが、保線区の人達にはほとんど知らされていないのです。　まさか、女の娘とネコがそんな仕事ができるなんて思ってませんしね。
ほどなくにゃんこ駅長とりおんちゃんが問題の場所に着きました。確かに列車が立ち往生して動けないようになっているようです。　にゃんこ駅長とりおんちゃんはトロッコを降りるとまずは線路の点検です。
そして問題の場所を見つけて、よく見てみるとボルトが一カ所抜けかかっています。

にゃんこ駅長はりおんちゃんに云って工具を持ってくるとボルトを締め更に別の機械を使ってポイントの動作点検を行います。念のためと云う事で調査機を使ってから問題が無いことを確かめるとポイント近くの保線区用電話機を取って連絡を入れます。

り『もしもし、こちらは田舎駅勤務のりおんです。』
保線区連絡係『もしもし、これはこれはりおんさんはじめまして。どうされました？ってどこからかけてるんですか？』
り『故障したポイント近くの保線区用電話からです。』
保線区連絡係『それは、電話の表示で判るんですが・・・何故そこに？』
り『報告します。ポイント修理完了しました。』
保線区連絡係『えっ？？？田舎駅にはポイント故障の連絡入れて無いですよ。なぜ、判ったんですか？』
り『駅長さんのお友達が教えてくれたんで。。。来てみました。あたしに出来るかどうか不安だったんですが。』
保線区連絡係『ちょっと、待って下さい。』
そう云うと保線区連絡係さんは部長さんに向かって、
保線区連絡係『部長、例の箇所ですが、田舎駅の娘から直した、って連絡が入ってます。』
部長『なに！？田舎駅の娘から？なぜ、故障を知ったんだ？いや、直接聞く、ちょっと代われ。』
そう云って受話器を取ると、
部長『おはよう。私は保線区の部長をしてます。昨日はうちの運転手2名が世話になりました。で、ポイント故障を直したって？』
り『おはようございます。お世話だなんてとんでもないです。ポイント箇所の動作部のボルトが緩んで引っかかってましたので、締め直しました。動作は確認できてないんですが。』
部長『こっちから故障してるのは云ってないのになぜ故障してるのが判ったのかね？』
り『駅長さんのお友達に教えてもらいました。あとは、田舎駅のトロッコで来ました。』
部長『なるほど、ちょっと動作確認をしてみよう。』
そう云うと部長さんは運行係に指示を入れて動作点検を行ってみると運行に支障が無いということで、ランプが黄色から青に変わります。
部長『動作確認ができました。これで、列車が運行できます。ありがとう。気をつけて駅に戻ってください。』
り『いえ、とんでもないです。あたしも田舎電鉄の社員ですもの。直って良かった～　それでは。』
部長『いや～ちょうど対策の検討を始めたところだったんだよ。ありがとう。それじゃ。』

そう、りおんちゃんが保線区に電話連絡を入れたのは、ちょうどさっきの保線区全員を集めて話をした直後だったのです。
そして、運行係に連絡を入れて特急列車も少し遅れましたが、無事に本線を通過して行く事ができました。
にゃんこ駅長は朝の散歩の途中で山の友人から列車の運行が変だと云う話を聴いて、友人達とポイント箇所まで見に行ってたので散歩の時間が長くなったというわけです。　そして、りおんちゃんを引っ張りだして故障箇所の修理をさせたのです。　りおんちゃん達が乗ったトロッコは部屋付きなので寒くも無く、田舎駅に戻るとにゃんこ駅長の云う通りに使った機械を元に戻して駅舎に戻ります。

り『無事に列車が動いて良かったです～　朝ご飯は冷めちゃいましたけど。。。』
に『列車がちゃんと動けば朝ご飯なんて冷めてもどうでもいいにゃ。おつかれさんにゃ。』
り『そうですね。駅長さん寒く無かったですか？雪の上を歩いて。』
に『だいじょうぶにゃ。』
り『でも、、、ちょっと失礼します。』
そういうとりおんちゃんはにゃんこ駅長を抱いて自分の脚の上に載せます。にゃんこ駅長の食事もちゃぶ台の上に載せて食べれるようにしました。
に『わるいにゃ・・・』
り『い～え、この程度はなんて事ないですよ。いただきま～す。』

その頃保線区では、、、
部長『連絡係、報告書作っとけよ。』
連絡係『なんて、作りますか？行った人間が居ないので報告書になんて書きましょうか？』
部長『う～んと、降雪並びに気温低下によりボルトに異常発生。田舎駅員により帆修理完了。とでも書いとけ。』
連絡係『は～い。それしかないですよね。』
部長『それで、あとは保線の間隔とシフトを少しいじるか。』
連絡係『そうですね。今年は冷えかたが異常なんでもう少し間隔を狭めて、除雪運転の時に保線車も繋ぎますか？』
部長『そうだな。除雪のペースが遅くなっても仕方が無いな。その時に田舎駅側線経由だと1日で終るのか？』
運1『部長。田舎駅側線経由で除雪しながら保線車両で点検すると1日では終りませんね。』
部長『やっぱりそうだよな。田舎駅に1泊するしかないか。』
運転手全員『えーーーーーーーーーっ！！！！！』

おや！？　これから急展開の様子みたいですね？

保線作業

さてさて、、、とりあえず田舎電鉄本線のポイント故障（軽いネジの弛みだったんですが）を直して田舎駅に戻ってきた、にゃんこ駅長とりおんちゃん。
使った部品とか工具の後片付けをしていると既に時間は夕方になってしまいました。
り『駅長さん、どうしてポイント故障が判ったんですか？』
に『山の友達が教えてくれたんにゃ。列車が立ち止まってるって。』
り『ふ～ん。保線区の部長さんにも不思議がられてしまいましたけど。。。』
に『田舎駅勤務の駅員に保線の仕事はいらないからにゃ。たった一人で連絡もろくに入らないからニャ。』
り『部長さんも「連絡はどうやってとった？」って不思議がってましたからね。』
に『まぁ、、、部長さんはそんなに不思議だとは思ってニャイにゃ。これで３回目ににゃるからにゃ。』
り『いままでにもあったんですか？２回も？』
に『冬のこの時期は気温の関係でネジの弛みやらポイントの凍結やらでどうしても保線がおいつかニャイにゃ。』
に『前の２回はこの前の運転手が直してるニャ。』
り『えっ！？２回も？じゃあ、あの方も２年居たんですか？』
に『いや、一冬で２回おきたんにゃ。ポイントの凍結とネジ緩みの２回ニャ。それ以降保線が強化されてからでてはいなかったんにゃ。』
り『そんなに・・・大変だったんじゃないですか？』
に『ポイント凍結の時は半日かかってポイント全ての凍結箇所を融かしてまわったんにゃ。』
り『そういう寒い中で半日もいたんですか？凄いですね。』
に『そう云うのに耐えて暮らしたから？か？田舎駅から転勤になってからの研修が簡単過ぎた。ってこの前来た時に云ってたにゃ。』
り『そういえば、そうですね。田舎駅勤務時代を思えばどんな研修も軽い軽い。って。』
そんな話をしながらも、りおんちゃんは夕飯の支度を始める準備に入りました。
り『そろそろ、お夕飯の準備を始めましょうか？今日はお昼ご飯食べてないからお腹がすいたんじゃありません？』
に『そんなには空いてニャイニャ。忙しかったから忘れてた。』
り『じゃ、準備始めますね。』

その頃本社保線区の中では部長さんと副部長さん、課長さんが話し合いをしていました。
部『さて、今日の報告書なんだが・・・田舎駅の駅員は保線作業を正式には認めてない。どうする？』
副『以前の報告書と同じではまずいですか？』
課『そうですよ。今保線区に居る彼が同じように保線作業をした時に臨時で認めてもらった事がありますよね。』

部『前の時は緊急時と云う事で２回ほど上には強引に認めてもらった経緯があるのは覚えてる。但し、今回は保線区で全然把握する前に本線に異常が発見されて、保線区員が出ようとした時には既に田舎駅から駅員が現場に行って既に作業を始めていたんだぞ。今回は田舎駅の駅員が作業をした事は特例処理で問題は無いが、保線区が何故把握する前に田舎駅から駅員が出た事の理由はどうする？　結果的には助かったのだし、田舎駅の美少女の美声が聴けるハプニング付きだったので上から怒られるのは別にいいんだが。』
課『そうですね。保線区員よりも早くトラブル箇所に急行されてしまったので、これからの保線計画を見直さないとダメでしょう。』
副『でも、、、聞いた話では田舎駅の駅長の持つ山のネットワークにかなう情報処理なんて現実にはできませんよ。』
部『そこが問題なんだよな。そうなると保線区員を線路に張り付けるしか手が無いじゃないか。』
副『それは確かにいいかも知れませんが、他の仕事に割く人員が足りなくなりますね。』
課『うちにいる彼に聴いてみたらどうでしょう？彼なら田舎駅で緊急修理の経験もあるし、少しは私達より田舎駅の事情も判ってるし。』
部『そうだな、ちょっと呼んで聴いてみるか。』
ほどなく除雪車を運転していた彼が会議室に呼ばれました。
運１『部長、お待たせしました。何でしょう？』
部『どうした？時間がかかったようだが。』
運１『先日運転を担当した除雪車の整備を確認していましたので。車庫からきました。』
部『それは、ご苦労。仕事の邪魔をして悪かったな。』
運１『いえ、それはいいんですが。ほとんど確認も終りましたし。』
部『実はな、今朝のポイント故障で田舎駅勤務の駅員が自分達保線区員より早く現場に急行して修理をしたけんだが、田舎駅駅長の持つネットワークが自分達の情報収集より早かった事が最大の要因だ。』
運１『そうですね。にゃんこ駅長さんの持つネットワークは凄いですからね。山一つ丸ごとカバーしてますから。』
部、副、課『山一つ？？？そんなに凄いのか？』
運１『そりゃ、田舎駅周辺の山に関しての情報の一切合切が入っているようです。』
部『判った。うちの保線区じゃそこまでやるのは無理だ。と上に報告しよう。現実的じゃないからな。』
副『その方がよさそうですね。　しかし、そんな情報網が合ったら無敵だな。』
運１『でも、基本的には田舎電鉄はウルサイから嫌いだって云っているそうですね。』
課『その仲間という方々に見回りを頼むのは無理そうだな。でも、なんで今日は教えてくれたんだ？』
部『今度行く機会があったら聞いてみるか。本人に。』
副『そのほうがいいですね。次に行くのは・・・臨時に除雪点検ダイヤを作らせてますから、明

日には判るでしょう。』
部『よし、そうと決まれば本日の会議は終了。保線計画については私から上に報告しておく。副部長と課長は本日の臨時点検作業の内容をチェックしておいてくれ。』
副、課『判りました。いまのところ本線の臨時点検では異常は無いそうです。』
運１『え・・・また、田舎駅側線の保守に入るんですか？』
部『そうだ。田舎電鉄全線の臨時点検作業をしろ。と上からの命令だ。何でも立ち往生した特急列車にお偉いさんが乗ってて、都会での商談会に遅れたらしい。保線区の保守の見逃しじゃないのは理解してくれたがな。』
運１『そんな事が判るんですか？』
副『今朝、カワイコちゃんが直してくれた箇所の１週間前の定期点検報告書で自動点検済みなのが判ったからな。』
運１『そんな箇所のネジが何故？緩んだんでしょう？』
課『現場の気温の上下とかいろいろと原因んは考えられるが最終的にはこれと云って決めては無いんだ。』

その頃田舎駅では・・・
に『りおんちゃんと一緒にお風呂に入ると身体を洗ってもらえるかないいにゃ。』
り『そうですか？駅長さんってネコなのにお風呂を嫌がらないんですね。』
に『お湯につかると気持ちいいのはネコも人間も同じだにゃ。それにりおんちゃんに抱えてもらって入るのは格別だにゃ。』
り『いつも一人で入ってるんですけど、たまには駅長さんと二人で入りたいな、って思うんですよ。お話もしたいし、駅長さんは匂いはしないんですが、たまにはお風呂で洗ってあげようかな。って。』
に『どれどれ、もう身体も洗ってもらったしそろそろあがるかにゃ？』
り『は～い。そうしましょ。ほら、駅長さんもタオルにくるまらないと風邪引きますよ。』
に『自分は身体を拭かなくてもいいにゃ。りおんちゃんが先に拭いて着替えるニャ。』
にゃんこ駅長にはタオルをかけて、りおんちゃんは身体を拭いてから、髪をタオルドライしてからパジャマに着替えてにゃんこ駅長の身体を拭きあげます。
り『駅長さん、ドライヤーは？』
に『ドライヤーだけは勘弁して欲しいニャ。』
り『じゃあ、居間で炬燵に入りましょう。』
お風呂から上がったにゃんこ駅長とりおんちゃんは駅舎の居間に戻るとお互いの定位置で炬燵に入ります。
ここんところ寒いのでりおんちゃんは居間の炬燵で勉強をしているようです。
に『りおんちゃんは何の勉強をしてるんだにゃ？』
り『鉄道の仕組みとか、鉄道の役割とか、あとは具体的な保線、駅勤務、御客様対応マニュアルとか？田舎電鉄社員教育集って本を入社の時に貰ったので、それを読んだりテストをしたりしてます。』

に『テスト？自分で時間を決めてかにゃ？　そうすると、問題集付きにゃ？』
り『そうですよ～　まだ、問題集の半分も終ってないんですけどね。』
そう云って参考書、テキスト、問題集とニラメッコしている、りおんちゃんです。
に『（前任の時は参考書と問題集の１／３程度までやった時点で本社に戻ってから、かなり優秀な成績で特急列車の副運転手になって、正運転手まであと半年とか云われているらしいんだが、りおんちゃんは既に１／２までこなしてしまっている。このまま本社に帰任したらえらい騒ぎになってしまうぞ。）』

り『駅長さん、何か云いました？』
に『にゃんでだにゃ？』
り『だぁってぇ、、、さっきからアタシの事ずっとじーっと観て、口をもぐもぐさせてるんですもの。駅長さんに見つめられたら恥ずかしいです。』
に『ネコに見つめられて恥ずかしいのかニャ？人間のりおんちゃんが。』
り『ネコとか人間とかそういうのってアタシの中には感覚として無いんですもの。大好きですよ、駅長さん。』
に『ネコをカラカウものではにゃいにゃ。』
プイ！と他所を見るとにゃんこ駅長は炬燵から出ていつも通りねぐらに入ります。
り『駅長さん、ごめんなさい。でもからかっているわけじゃないですよ。　おやすみなさい。』
そういってりおんちゃんは自分の宿舎に戻ります。

に『（来た頃と違って感も良くなっているし、勉強の量も半端じゃない。さらに最近は自立心も格段に強くなっている。それに、とにかく正確に確実に仕事をこなしている。これだと、半年後の転勤の話はそのまま受けて帰任となるのかにゃ。）』
に『（どうするかは、りおんちゃんが決めることだにゃ。しかし、このまま帰任したら本社は大騒ぎになるだろうにゃ。これは本社に連絡を入れといた方がいいのかにゃ～』

次の日の朝、こちらは大騒ぎ中の保線区部内です。
なんでも、田舎電鉄全線の再点検計画が発表されたのですが、田舎駅側線の保守点検係の氏名欄が空白のまま、発表されたのです。
『なんで、名前が書いてないんだ？』『これは部長の横暴か？自分が行く気なんじゃ？』『自分が行きたかった～伝説の美少女に一目・・・』『俺だって観たいし、話もしたいぞ！』

部『静かに！これから田舎電鉄全線の保守計画の説明に入る。』
『すいません。田舎駅側線の氏名欄に氏名がありませんが、誰が行くんですか？』
部『黙って聞け。理由はこれから副部長が説明する。』
副『みんな、おはよう。田舎駅側線の保守担当者氏名が無いことがかなり不満、疑問のようだが、理由をこれから説明する。』
運転手さん、保線係、点検係の人達みんな説明を聞いています。

副『基本的に田舎駅側線については追加での保守点検は計画から外す事にした。何故なら昨日の事を考えてみれば判ると思うが、自分達保線区員よりも優秀な保線係が側線にはついて、一年中観てくれている。今更俺たちがいったとしても、今日は良い。だが、明日はどうだ？側線とは云え毎日歩いての保守点検で見回る事もできない。本線だけでも十分に人手不足なんだからな。』
『でも、それじゃ上が納得しないんじゃないですか？』
部『上には見回るって計画書を出してある。』
『見回るって計画書を出して見回らないと嘘になりませんか？』
部『誰が見回らないと云った。毎日一人づつ全員が側線上を点検車で走るんだ。側線の点検はそれで十分だ。』
副『だが、勘違いするなよ。田舎駅での停車は認めん。低速走行にはするが停車して停まっていたんでは、本線合流時間がダイヤと合わなくなってしまう。』
『え～～～、話は出来ないのか？？？　残念！！！』
副『見かける事ができるだけで我慢しろ。田舎駅には連絡は入れておくからホームにでて手の一つも振ってくれるかもしれんぞ。　それから、低速走行の速度は10キロ～15キロの範囲に入れる事。遅くても早くてもいかん。』
部『でわ、解散。各員本日の持ち場について作業開始。』
『はい！』

田舎駅では珍しく本社からの連絡用ファックスがカタカタ云って紙を吐き出しています。
り『駅長さん、本社の保線部長さんからファックスが入ってきました。』
に『なんて、書いてあるニャ？』
り『え～と、本日より毎日田舎駅側線の走行点検をします。田舎駅通過は午前11頃になります。って。』
に『保守自動点検車で毎日線路の点検をするんだにゃ。』
り『そうらしいですね。でも、自動点検車とはいえ毎日は大変ですね。』
に『りおんちゃんは乗った事があるのかニャ？』
り『乗った事は無いですけど、マニュアルに操作の仕方とかは書いてありますから。それで。』
に『勉強が役に立ってるニャ。』
り『そうですか？あっ、下の方に手書きで何か書いてある。』
に『にゃんだにゃ？』
り『田舎駅の美少女へ、できたらホームに出て作業員に声をかけてくれないだろうか？ホームは低速で通過するので。保線区部長より。ですって。アタシが声をかけるだけで何かあるんでしょうか？ね？駅長さん？』
に『知らないニャ～（自分自身の自覚だけは来た時と変わらず鈍いにゃ。りおんちゃんに声かけてもらったら保線区全員大喜び間違いにゃいにゃ。）』
り『ふ～ん、声をかけるだけじゃなくて停車して降りてもらって駅でお話したいですね。』
と、噂の美少女はとんでも無い発言ばかりしています。　もしも、降りて話を始めたら帰ってこ

ないまでも、大幅に時間を遅れて本線のダイヤが乱れかねないのを部長さんは一番心配したんですけどね。

そんなこんなで、いつも田舎駅側線に電車が入った時に鳴るベルが10時半頃に今までとは違うリズムで鳴り、ほどなく自動点検車が遠くに見えてきました。
り『あっ、見えましたよ。駅長さん。何か普通の列車みたいですけど、１両だけなんですね。』
に『あの列車も前は結構頻繁にここにきたんだがにゃ。見るのは久しぶりニャ。』
自動点検車は田舎駅に近づくと規定通りにちょっと速い自転車くらいの速度の時速を10キロに落としてホームに進入してきます。　運転席の窓も全開にしているようです。
ホームでそれを見ていたりおんちゃんですが、何か手に持ってホームの端に近づいて行きます。
に『りおんちゃん、あんまり近づくと危ないにゃ。手に持っている紙袋はにゃんだにゃ？』
り『声をかけるだけじゃ無くて、アタシからのご苦労様プレゼントです。あのくらいの速度なら手渡しできますわ。』
そして、手に持った紙袋を精一杯線路の方に差し出すと運転手さんも意図が判ったのか、窓から手を出してきます。　おや？よく見ると運転手さんは保線区部長さんで、隣にいるのは前回除雪作業にきた運転手さんです。
運１『部長、りおんさんが何か紙袋差し出してます。』
部『噂とおり、いや噂以上に可愛い、気が利く娘だな。たぶん、あの紙袋は差し入れのつもりだろう。ちょっと、運転を頼む。』
そう云うと部長さんは窓からできるだけ、手を伸ばして低速走行のままでしたが、なんとか無事に受け取る事ができました。　通過の瞬間にもちろんりおんちゃんの『お疲れ様です。頑張ってくださいね。』という声も聞く事ができました。
部『噂以上に可愛い娘だな。　どれ、この紙袋の中身はなんだ？　おや、手紙も入ってる。』
運１『部長、ホームを通過したので加速します。ところで、なんて書いてあるんですか？』
部『ほう、可愛い字だな。「保線作業お疲れ様です。この先の鉄橋付近のレールが少しだけですが、凍結してます。通過速度は30キロくらいで保守モードをＢ１に切り替えた方がいいかも知れません。袋のクッキーは今朝焼きあげたものです。お昼ご飯にはならないですが、頑張ってください。」と書いてある。彼女なんで保守モードの事なんて知ってるんだ？』
運１『入社した時に配られるマニュアルを見て勉強したんじゃないですか？僕もかなり読みましたから。』
部『そうか。入社の時に田舎駅勤務に必要なマニュアルを渡されるからな。彼女からのアドバイスの地点はもうすぐだろう？速度を30キロに落として保守モードをＢ１に変更。測定通過する。』
運１『了解。保守モードＢ１に変更。速度30キロ維持。』

自動点検車で問題の箇所を通過しようとしたその時に運転席にあるチェックランプが青から黄色に変わって異常を感知したようです。
部『速度を時速５キロまで落として通過に変更。』

運１『速度を５キロに変更。変更完了。』

速度を５キロまで下げると自動点検車の方は入念にチェックを行いながら、軽微な修正が可能な速度まで落として通過していきます。
線路ギワのところではいろんな機械やらアームが出たり入ったりしています。
そのまま１キロ走るとチェックランプはまた青の点灯に変わりました。
部『よし、修正は終ったみたいだな。速度アップ時速40キロまで加速。』
運１『速度アップ時速40キロまで加速します。加速後に40キロを維持します。』
部『じゃぁ、彼女からもらったクッキーを食べるか。お前は前を見ながらになるが、ほら最初の１個だ。』
運１『ありがとうございます。どれどれ、やっぱり美味しいですね。』
部『ほう、これは何とも云えない美味しいクッキーだな。甘すぎないし、食べてると力がでてきそうだな。』
運１『この前のとはちょっと味付けが違うみたいですね。前に田舎駅で食べたのはもうちょっと甘かったんですが。』
部『その時は自分と駅長が食べるつもりで焼いたからそういう味付けだったんじゃないか？これは通過する保線区員にあげるつもりで焼いたからな。男にはほんのり甘い方が良いと考えて焼いたんじゃないのか？』
運１『その辺の気配りが凄いですね。次に通過する人には何かこちらからもプレゼントを渡すようにしませんか？』
部『田舎駅には滅多な物は持ち込めないからな。でも、貰うだけじゃこちらの気も済まない。これから毎日彼女は何かしら作って渡してくれるだろうからな。ホームに進入して少ししたらこちらからのプレゼントをホームに落としてやる分にはいいだろう。人事には俺から話をしておこう。』

美少女は？

いままで名前無しでやってきましたが、ここで登場人物の名前の整理をします。←もっと早くやれって！

田舎駅駅長：にゃんこ駅長。そのまま普通のネコだが田舎駅では言葉を話す。
田舎駅勤務駅員：今村りおん、謎の噂の美少女。田舎駅勤務２年目だが。。。
保線区部長：鳴海さん一田舎電鉄勤続は20年以上の大ベテラン。
保線区副部長：轟さん一田舎電鉄では鳴海部長の同期で他部署の部長に推薦されたが断って保線区に留まる。
保線区保線課長：帆主さん一田舎電鉄の勤続年数は鳴海部長より長いが昇進試験を白紙回答して課長に留まる。
社内では最古参に近く、保線区の生き字引と呼ばれる。
運転手１：蕪村くん一田舎駅勤務を経て最終的に保線区総合保線係の５年目。成績優秀の有望株だが、本人の憧れは帆主課長らしいともっぱらのうわさ。
運転手２：佐原くん一入社以来保線区勤務の蕪村くんの１年後輩。

さてさて、田舎側線の点検作業を終えて本線の保線区に戻ってきました、鳴海保線区部長と蕪村運転手です。
蕪村『鳴海部長、線路の異常は１カ所のみで軽い保守作業で済んでよかったですね。ただ、このままだと明日もどっかがおかしいところが出そうな気がするんですが。』
鳴海部長『蕪村もそう思うか？田舎側線はやってない訳ではなかったが、本線より間隔が空いていたからな。それにしても田舎駅駅長からのアドバイスも今村さんのアドバイスも余りの的確さに驚きだ。見てもいない箇所の点検モードをアドバイスしてくれるなんて彼女は何者？だ。』
蕪村『点検モードだけじゃなく、通過速度まで的確でした。あれ以上速くても遅くても発見は難しかったんじゃないでしょうか。相当の経験を積んだ人でも見逃すくらいでした。』
鳴海部長『う～ん、彼女が本社勤務になったらうちに欲しい。あの調子だと何も教えなくてもうちの仕事全部できるだろう。いや、この保線区の保線計画指揮をさせてみたいもんだ。』

蕪村くんも鳴海部長のこの一言に驚きます。なんと云ってもいま保線区の保線計画は部長と課長が決めて、指揮は副部長がやっています。今までいろんな形式を試してきたのですが、このやり方が一番と決めてから３年ほどやってきました。ただ、どうしても立案者と実行者での考え方の差がでてきてしまいます。　その都度轟さんと帆主さんで話をして切り抜けてきてはいるのですが、その際に若干の空白ができて作業指示に10分ほどの遅れがでてしまっていて、鳴海部長はなんとか全てを一人でできないかと考えていて、それは保線区全員が知っているのですが、そこまで総合力を持った人材の育成ができていないためでした。

蕪村『鳴海部長、そこまで彼女、いえ今村さんにそこまでの力があるんですか？』

鳴海部長『彼女には確かに経験は無いかも知れない。だが、駅長さんから場所を聞いてどんな不具合かまで察してのアドバイスができる人間はうちには残念ながらいない。俺は個人的には３年後に蕪村、お前ならできるんじゃないかと思っていた。』
蕪村『部長、それは買いかぶり過ぎです。自分でもあそこまでの事はできません。』
鳴海部長『いや、３年後にはできそうだな。田舎駅の彼女はどうやってあそこまでの知識と判断力を身につけたんだろう。』
蕪村『田舎駅での勤務でじゃないでしょうか。田舎駅に駅員は一人なので、改札から売店、駅構内の線路の保守点検、工具の管理から倉庫管理までおよそ全ての仕事をしますからね。』
鳴海部長『駅長のご飯作りが嫌で逃げ出す社員もいるらしいが？』
蕪村くんは頭をかきかき、、、『部長、、、それは言わんでください。』と小声で呟きます。
そう、田舎駅勤務中に山道を歩いて逃げ出そうとした事は別の意味で田舎電鉄の話題になっていたからです。
結果的にはそれを乗り越えて今は期待の有望株となっているわけですが。

いま、蕪村くんが云ったとおり田舎駅勤務に線路の保守点検は業務の範囲外ですが、駅構内については田舎駅の駅員がやらなければ、他にやる人がいません。ですから、田舎駅での勤務中に田舎電鉄での業務のほとんどを経験できるというわけです。　もちろん、にゃんこ駅長さんのご飯作りもペット同伴のお客さんへの対応力をやしなうためです。　それはおまけという噂もありますけどね。
保線区に戻ると鳴海部長は自分の席に座ると『蕪村、今日の保線報告書は明日の朝までに提出すればいいぞ。』そう云って机の上の書類を難しい顔で見始めました。
轟副部長『おい、蕪村。お疲れ様。コーヒーでもどうだ？』
蕪村『副部長のおごりなら。』
轟副部長『ははっ。お前に金をださせるもんか。その代わり社食だがいいか？』
蕪村『田舎電鉄の社食は外部からも食べにくるほど美味しいって評判じゃないですか。十分ですよ。』
轟副部長と蕪村くんは二人揃って田舎電鉄でも社内福祉の一環で特に豪華に作ってある社内食堂のカフェスペースに腰を下ろします。　轟副部長が店員に声をかけてコーヒーを頼むと、ほどなくホットコーヒーが二つ二人の前にでてきました。

轟副部長『このコーヒーのうまさは他に無いからな。』
蕪村『そうですよね。こんな美味しいコーヒーが飲める社員食堂って無いですよね。』
轟副部長『ところで、蕪村、お前に聞きたい事があるんだが。いいか。』
蕪村『ええ、なんでもいいですよ。彼女とかはいないので答えられませんけど。』
轟副部長『お前に彼女がいないのは保線区内での七不思議の一つだからいまさら聞かん。そうじゃなくて、田舎駅にいる今村さんだったかな？駅員の事だ。どんな娘で性格とか知識とかについてだ。お前の感じた事を聞きたいと思ってな。』

蕪村『なぜ、僕なんですか？佐原でもいいじゃないですか。』
轟副部長『いや、佐原にも聞いてみたが、クッキーが美味いとか、性格は淑やかであれが大和撫子だとか抽象的なところしか報告が無いんだ。揚げの果てにはお嫁さん候補１位とか言い出す始末だ。俺が聞きたいのそういうのじゃなく、客観的に観て駅員としてどうか、鉄道会社の社員としてどうか？だ。』
蕪村『すいません。佐原には自分からよく云っておきます。自分の指導が足りないせいです。』
轟副部長『それは持っている力の差があるだろうから、仕方の無い事だ。佐原はまだまだこれからの人間だから今村くんのレベルを知る事は無理だろう。だが、蕪村、お前くらいの力量があれば今村くんのレベルを推し量る事はできるだろう。』
蕪村『そうですね。自分から観て今村さんのレベルはたぶんですが、田舎電鉄のどこの部署に入っても半年以内に課長職以上になれると思います。知識量はたぶん自分以上だと思います。それと何かが起きた時の対応能力に加えて判断力など、どれをとっても水準を遥かに超えてます。
それに加えてあの可愛さと笑顔は話しかけられた人に拒否させる気力を無くさせます。』
轟副部長『正確無比な知識と判断力に加えて、笑顔付きの爆弾で攻められたら無条件降伏しかないという訳だな。』
蕪村『そうですね。理路整然とした知識で攻められたら、断るのはほとんど不可能でしょう。
でも、どうしたんですか？急に鳴海部長といい、轟副部長といい、今村さんの事を調べだすなんて。』
轟副部長『そうだな。どこまで話したらいいかな？部内の人間には秘密にしているんだが・・・　蕪村には云っておいた方がいいかな。　いや、実はな今度の人事異動の季節に今村くんを保線部に所属させようと今から部長、課長と一緒になって動いているんだ。まぁ、今度の事で他の部署も動き出しているらしいがな。田舎電鉄の全部書での争奪戦が始まっているんだ。まぁ、どうなるかは判らんが。』
蕪村『そうですよね～　彼女、いや今村さんが配属されたらいるだけで他の社員がはりきりますよね。』
轟副部長『だが、彼女の外観に惑わされて本質を観れなかったら、半年後にどうなるか・・・』
蕪村『こわい存在になりますよね。優しいけど、、、』
轟副部長『そこが判る人間じゃないと部下としても勤まらないぞ。もしもうちに配属されたら、次の日から保線計画指揮補佐くらいにはなるからな。』
蕪村『そして、半年後には・・・補佐が取れる？』
轟副部長『そうだ。その分部長と俺と帆主課長は他の仕事ができる。その代わり・・・』
蕪村『その先は聞かなくても・・・想像できます。　ところで、明日は副部長が田舎側線の点検ですよね。』
轟副部長『そうだが、何か今村くんに伝言でもあるのか？』
蕪村『クッキー美味しかったです。と教えてもらった箇所はしっかりと直しました。と伝えてください。』
轟副部長『ああ、判った。』
それから二人は保線区の事とか田舎電鉄の事とかをひとしきり話してから、轟副部長は保線区へ

、蕪村くんは宿舎に戻ります。
蕪村『（もしも、今村さん、彼女がうちの部署にきたら、みんな外観でかなりやられるだろうな。轟副部長は次の日からって云ってたけど、１ヶ月くらいは伝票とかそういう関係の仕事だろうな。でも、その間に保線区内の業務内容を把握したら、そんなに時間がかからずに保線計画指揮担当になるだろうな。こわそうだな～　あの笑顔で頼まれたら断れないよ。）』
蕪村『んっ？何を考えてんだ？俺は。』

こちらは田舎駅です。　点検車が通過してからりおんちゃんはいつもとおり駅内の業務とかをこなしていきます。　にゃんこ駅長はお昼寝です。
お昼近くになって周囲の山から普段とちょっと違う音がしてきました。
り『何の音かしら？いままで聞いた事があるようだけど、ちょっと違うみたい。』
に『二つ隣りの山での雪崩じゃにゃいかな？今までののよりも大きいニャ。このくらいだと線路への影響は無いニャ。』
り『今年は変ですよね。去年よりも雪崩も多いし、線路の不具合もそのせいじゃないんでしょうか？』
に『どうして、そう思うんニャ？』
り『去年と違う事が起きた時は去年までの違いを全て列記して比較するのが一番簡単に理由を見つける方法らしいですから。それから違う事が何にどういう影響を与えるかを考えれば推定できる理由は導きだせるらしいですから。』
に『その考え方もマニュアルかにゃ？』
り『ええ。そうそう、駅長さん、聞いて下さい。』と笑顔で話しかけるりおんちゃん。
に『何かあったんかにゃ？』
り『アタシやっと、マニュアルの半分が終ったんですよ。問題集での試験も全科目95点以上でした。』
に『それは、凄い事ニャ。』さすがのにゃんこ駅長も驚いているのか眼を丸くしています。

田舎電鉄の新入社員が受取る田舎電鉄マニュアル、規則集は全部で50冊以上で全てがもの凄く厚く500ページ以下のものはありません。その膨大な量の半分を読破しただけでなく、問題集で95点以上を取れるまで勉強したという事です。それがどんなに凄い事かはにゃんこ駅長も知っています。今までの田舎駅勤務をした駅員は全員が１／３以上を読破し、問題集もこなしているのです。　でも、１／２はいませんでした。それに全科目90点以上という駅員はいませんでした。

に『（やっぱり、この娘は凄い事になってしまったにゃ。この分だと今度の人事異動の時に動くニャ。今頃は田舎電鉄の各部署で争奪戦の真最中にゃ。どこの部署が強いんかにゃ？）』

にゃんこ駅長がそんな事を考えている最中にとうのりおんちゃんはお昼ご飯を作り為に台所に移動していまいました。
り『駅長さ～ん、お昼ご飯少し遅れてもいいですか～？』

に『かまわないにゃ。』
り『は～い。すみませ～ん。』
に『何かあるんにゃ？？？』
り『明日通過される方へのお菓子を焼く準備です～　今から仕込んでおいて明日の朝焼くんです～』
に『ふ～ん。』

雪崩で冠雪？

さてさて今日も朝が来ました。
まだ外は暗いようですが、りおんちゃんは起きだして台所でゴソゴソなにかやってますね。
り『えっとぉ、これを入れて・・・そういえばオーブンの温度はどうかしら？』
に『おはようにゃ～　こんな早くから何してるんだニャ？』
り『今日いらっしゃる方へのお菓子です～』
に『何ができるんだにゃ？』
り『秘密です～　駅長さんは食べないですから、いいじゃないですか～』
に『ところで、朝ご飯は？』
り『もうできてますよ～　食べられますか？』
に『食べるにゃ～』

りおんちゃんはにゃんこ駅長の食事を用意するといつものようにちゃぶ台の下に置いて、自分はまたお菓子を焼く為に台所に戻ります。
ほどなく美味しそうな匂いが駅舎内に充満すると・・・
り『うん。美味しく焼けたみたい。さっ、これを包んでっと。アタシも朝ご飯食べようっと。』
に『美味くできたんニャ？』
り『ええ。上出来でした。』
に『どんなのを作ったんだにゃ？』
り『え～とですね、保線車の運転でお疲れでしょうから、身体が温まるように少しショウガを入れて、あとリラックスできるようにハーブを少し入れたんです。あれと、お昼ご飯までの間なので少し多めにしてみました。』
に『多めだとお腹いっぱいになるんにゃ？』
り『少し多めくらいの方がお腹が空き過ぎないからいいんですわ。』
に『ふ～ん、そんなモノかニャ？』

朝ご飯を食べ終わるといつも通りに駅舎内の事、ホームの事なんかをするのですが、今日はりおんちゃんは田舎駅の線路をずっと観ています。
に『どうしたんだにゃ？』
り『駅長さん、何か線路が云ってるように、聞こえません？』
に『ん、何か云ってるニャ。どれどれ・・・』
そう云うとにゃんこ駅長は線路に降りてじっと線路を観ています。
ひとしきり線路を観てからホームに飛び上がってきました。
に『りおんちゃん、駅の先の方の橋の少し先が昨日の雪崩で雪が載ってるニャ。保線区に知らせるニャ。』
り『はい。判りました。』
りおんちゃんは駅に戻ると本社への連絡の為に報告書を作ると本社へファックスで送り出しました。
少しすると本社から「了解」とだけ書かれた書かれたファックスが保線区連絡係さんから流れてきました。
り『これで、たぶん大丈夫ね。』
に『保線区連絡係さんにはなんて伝えたんだニャ？』
り『田舎駅側線85キロ地点付近に雪崩で冠雪あり、積雪深さ約1メートルにつき保線車先頭に除雪設備追加。と書きましたが？』
に『雪の深さなんて・・・判るんニャ？』
り『えっ？だって駅長さんが云ったんじゃないんですか？』
に『自分は云ってないにゃ。りおんちゃんが線路から直接聞いたんニャ。』
り『線路の声ですか？へんなの・・・』
に『（この娘は線路の声まで聞けるようになったんにゃ。田舎電鉄でたぶん一人にゃ・・・）』

そのちょっと前に保線区では。。。
保線区連絡係『帆主課長、田舎駅からの連絡です。』
その日朝早番ででてた帆主課長は連絡係からの声に答えます。
帆主課長『なんて云ってきた？』
連絡係『田舎駅側線85キロ地点付近に雪崩で冠雪あり、積雪深さ約1メートルにつき保線車先頭に除雪設備追加。との事です。
保線車に除雪設備付けるように車庫に連絡を入れておきます。』
帆主課長『ああ、そうしてくれ1メートルなら通常装備で行けるな。それ以上だと除雪車が必要だが。』
連絡係『それと、今日の運転は轟副部長ですが、出社次第連絡をしておきます。』
帆主課長『そうだな。。。　ちょっと、車庫に行ってくるから轟副部長が来たら呼んでくれ。』
連絡係『了解しました。』
そう云うと帆主課長は車庫へ除雪設備の装着状況の確認に行きます。
20分ほどしてから帆主課長が戻ってくるとちょうど轟副部長が出社してきたところでした。
轟副部長『おはよう。今日も寒いな。』
帆主課長『おはようございます。副部長、今日の保線ですが田舎駅から連絡が入ったので保線車に除雪設備を付けてあります。』
轟副部長『そうか、どのへんがまずいんだ？』
帆主課長『田舎駅からの報告によると、駅を出てから15キロほどの地点ですね。』
轟副部長『ふ～ん、何時頃に連絡が入ったんだ？』
連絡係『ファックスのタイムスタンプはと・・・1時間ほど前ですね。』
轟副部長『ちょっと待て。1時間前に連絡が入ったと云う事は田舎駅の彼女はいったい何時に起きてそこまで行ったんだ？雪崩の現場を確認して帰ってくるまでの時間を考えるとあり得ないだろ。』
帆主課長『そういえば、そうですね。田舎駅から15キロ先まで往復する時間を考えるとちょっと・・・』
轟副部長『彼女の事だから嘘ではないと思うが、、、まぁ、準備しておいて悪いと云う事はない。行ってくるか。』
帆主課長『行ってらっしゃい。気をつけて。』
轟副部長『おう。判った。ほら佐原行くぞ。』
佐原『はい。』

轟副部長と佐原くんは除雪設備を追加した保線車に乗り込みます。
轟副部長『佐原、お前は保線車は何回目だ？』
佐原『えっと、、、蕪村先輩と一緒に３回乗ってます。』
轟副部長『4回目か。どうだ？今日は本線区内で単独運転をしてみるか？』
佐原『はい。トライさせて下さい。』
轟副部長『そうだな。じゃ、出発したら30キロ地点からやってみろ。』

轟副部長と佐原くんが乗った保線車は本線の点検に車庫から出発しました。

順調に本線の状態を確認しながら、運転席の計器を見つめて行きます。
順調に進めて本線が終るとそこから田舎側線へ入るポイントから側線に入り、同じように線路の状態を調べていきます。
轟副部長『田舎駅側線は本線より状態が悪いな・・・即座に線路の交換が必要ではないが、そのうち全整備の計画が必要になるかもな。』
佐原『そうですね。。。線路幅の公差も少し大きいですね。』
轟副部長『とりあえずのところは大丈夫だがな。そう云えばそろそろ田舎駅じゃないか？今日はちょっと停車していくぞ。』
佐原『えっ？でも、鳴海部長が停車はしないように、と云ってませんでした？』
轟副部長『本当は停車は確かにだめなんだが、今回は部長に許可を取ってあるから問題無い。どうしても確かめたい事があるんだ。』

こちら田舎駅は保線車が側線に入った事は既に判っています。
りおんちゃんは今朝焼いたばかりのお菓子を持ってホームで保線車が来るのを待ってました。
り『あっ、駅長さん。保線車が見えました。』
に『除雪設備もちゃんと付いてるニャ。』
り『そうですね。じゃ、少し前に出なきゃ。』
そう云ってホームの端に移動しようとした時に保線車が汽笛を鳴らしました。
り『あの汽笛は・・・今日は停車するそうです。』
に『（汽笛を聞いて停車合図も判るとは・・・いやはや。。。）』
保線車は合図とおりにホーム中間で停車しました。
保線車から轟副部長と佐原くんが出てきました。

り『後から降りた人はこの前の人だわ。先頭の人は何だか怖そう・・・』
に『轟副部長だにゃ。』
轟副部長『こんにちは。保線区の轟です。にゃんこ駅長さん、お元気でしたか。そちらが今村さん？』
り『こんにちは。田舎駅勤務の今村りおんです。』
佐原『こんにちは。この前はどうもお世話になりました。』
り『お世話だなんてとんでもないです。』
轟副部長『突然の停車で申し訳ない。今村さんにちょっと聞きたい事があるんだが、いいかな？』
り『なんでしょう？』
轟副部長『今朝の雪崩での冠雪報告なんだが、行って観てきたのかね？』
り『いいえ。ホームの整備って云っても雪かきですけど、してたら何か線路が訴えてるような気がしたので線路を観ていたら異常があるって聞こえたので、駅長さんに確認してもらったんです。』
轟副部長『なに！？線路の声が聴こえたのか？凄い事だ！』と、思わず大きな声で叫んでしまいました。
佐原『副部長、声が大きいです。それに線路の声ってなんですか？』
轟副部長『線路とずっと付合ってると繋がっている線路からでる異常が判るようになると云うんだ。帆主課長も一度経験したらしいがな。』
佐原『そんなに凄い事なんですか？』
り『でも、毎日線路を観てると何となく雰囲気が違うって事はないですか？』
轟副部長『いや～そこまでなってるとは。うん、今村くん、来年はぜひとも本社保線区に来てくれないか？』
り『えっ？？？本社保線区？？？アタシ、もう移転なんですか？？？田舎駅を離れてですか？？？』
轟副部長『いや、すぐにではない。まぁ、来年まで考えておいてくれないか？』
り『突然、そんな事をおっしゃられても、今はまだ何も判りません。そうそう、これ途中で食べてくださいね。』
そう云って今朝焼いたお菓子を轟副部長に渡すと、轟副部長はお菓子の入った袋を受取って保線車に戻って行きます。
運転席に戻ると窓を開けてりおんちゃんに声をかけます。
轟副部長『この先15キロ地点だな？』
り『はい！雪崩で雪が流れてきたので通常の積雪とは異なりますので、注意してくださいね。』
轟副部長『判った。通常よりパワーを上げて徐行するよ。』
り『それと、線路公差が広がっているので、保線車はＢモード３で通過してください。』
轟副部長『了解。何でも知ってるんだな。』
佐原『副部長、出発準備OKです。』
轟副部長『よし、出発！』

ポー、ポー、汽笛で合図してから保線車は出発します。
り『気をつけて～。』

轟副部長はりおんちゃんとにゃんこ駅長がホームで見送るのをミラーで確認しながら保線車を走らせていきます。　まもなく冠雪していると云われた場所に近づくと保線車の速度を落として保線モードを切り替え、佐原くんには機関出力を上げるように指示をしながら運転していきます。
轟副部長『おう、確かに雪をかぶってる、保線モードのチェックはどうだ。』
佐原『確かに線路幅の公差が大きくなっています。もう少し徐行しないと。』
轟副部長『ようし、あと10％減速、出力はそのまま。』
轟副部長『う～ん、確かに雪崩で流れてきた雪の影響がでているな。保線モード３で線路幅の修正もしながら進まないと無理だな。』
佐原『保線モードは正常動作、保線機も正常に動作修正してます。』
轟副部長『しかし、線路の状態をここまで把握できるとは・・・たいしたものだ。』
佐原『そうですね。ジブンには検討もつかないです。』
轟副部長『そうりゃあ仕方が無いことだ。常に駅勤務で線路と向き合ってきたからこそだ。』

そうこうしているうちに冠雪箇所も無事に通過、正常に修正を終らせる事ができ通過していきました。
轟副部長『よし、一番大変なところは抜けたな。』
佐原『そうですね。線路の状況も田舎駅側線に入った時と同じような感じになってきました。』
轟副部長『よろしい。モードをAに切り替えて少し速度を上げて進行するぞ。』
佐原『了解しました。出力は下げますか？』
轟副部長『そうだな。通常の検査モードなら出力は下げておいて問題ない。20％下げておけ。』
佐原『副部長、、、そろそろ食べませんか？』
轟副部長『そういえば・・・開けてみろ。』
佐原『今日はちょっと変わったクッキーですね。星型とか丸とか。あ、なんか紙が入ってます。』
轟副部長『読んでみろ。』
佐原『え～と、お仕事お疲れ様です。違った形のがありますが全種類食べてくださいね。各2個づつありますから。だそうですが・・・』
轟副部長『何か考えがあるんだろ。同じ形のを続けて食べちゃいかんぞ。』
佐原『じゃ、自分はまず星から。』

轟副部長『何でもいいぞ、一個取ってくれ。』
佐原『じゃ、、、副部長には丸を。』
佐原『あっ、これ野菜の味がします。』
轟副部長『これは、肉の味付けになってるぞ。本社に戻ったら理由を聞いてみるか？』